

歴史小説の書き方～『魯肅伝』上を題材に～

1. はじめに

三国志を初めて読むと、魯肅はすごく謎なんです。

三国志は、三国が覇を競う物語。曹操・劉備・孫権を（対等な）ライバルと期待する。ところが、魯肅は孫権の部下だが、劉備に便宜を図る。かといって、「孫権を裏切った売国奴」と処罰されるわけでもない。

劉備にいいように使われたお人好しに見えるが、そんな甘いことが通用するのか。もしも「劉備や諸葛亮にだまされ、ウツカリ孫権の国益を損なってしまったダメ外交官」ならば、彼を使い続けている孫権集団は馬鹿ばかり。諸葛亮は、失脚必至の頼りない人物を軸に戦略を組み立てたことになる。…本当にそうか？ 2010年以来の疑問！

謎を解くため、魯肅の行動を劉備への「投資」と位置づけ、投資家として描こうと考えました。劉備に、荊州（に付随する兵員・税収）を使わせ（投資し）、曹操を牽制させる。曹操に制約が生まれると、利益を得るのは孫権。魯肅は周瑜に倉庫ごと贈ったことがあるが、これも投資に見え、投資家としてのキャラクターが誕生しました。

魯肅の家を、後漢を通じて脱税をしてきた中小豪族と設定し、先祖代々、蓄財と投資のノウハウが継承されてきたと設定。魯氏の家長は、「利殖の義務」を自らに課して民の生活を守ってきたとし、経済・相場の知識を持っていても不自然でない。

魯肅が孫権に「漢室復興を諦めろ」というが、投資家の思考法・語彙に沿うならば、後漢に投資する価値がない（将来性がない）という意見の持ち主となる。後漢を見極めたエピソードが必要……と小説家は考えます。作中エピソードを設けず、登場時点から後漢を見捨てているとすれば、ストーリーに面白みと説得力を持たせられない。

2. 後漢との御縁さがし

小説家が安易に頼るのは、皇帝（時期的には靈帝）とに接点を持たせ、主人公に不快な思いをさせること。トラブルに巻き込まれる、微行した皇帝に出会う等。だが魯肅は徐州で生まれ育ったため、雒陽にいく理由がない。

諸葛瑾を主人公とするならば、諸葛瑾伝に「瑾少きとき京師に遊び、毛詩・尚書・左氏春秋を治む」とあり、京師＝雒陽に行かせることができるが、魯肅は不可能。

- ・『三国志』魯肅伝：魯肅、字は子敬、臨淮の東城の人なり。
- ・『三国志集解』魯肅伝：臨淮郡は、歩騭伝に見ゆ。東城は、魏志呂布伝注引先賢行状に見え、「陳登を東城太守と為す」といふ。……（盧）弼按ずるに、郡国志下邳国に東城有り、即ち臨淮の東城なり。下邳本は臨淮なり。

魯肅の故郷は臨淮郡であるが（魯肅伝）、盧弼『三国志集解』によると、下邳国と同じ場所である。「下邳国」には、「下邳王」がいるのではないか。皇族の下邳王と接点を作り、下邳王に後漢を象徴させ、魯肅に不快な思いをさせればよい。

しかし、魯肅の少年期に王が不在である可能性がある。王の存在が不明ならば登場させてよいが、不在であると史料が証明していれば、登場させられない。

- ・『後漢書』列伝四十 孝明八王 下邳惠王（劉）衍伝：孝明皇帝九子あり。……衍立つこと五十四年にして薨じ、子の貞王成嗣ぐ。永建元（一二六）年、成の兄二人及び惠王の孫二人を封じて皆列侯と為す。成立つこと二年にして薨じ、子の愍王意嗣ぐ。陽嘉元（一三二）年、意の弟八人を封じて郷・亭侯と為す。中平元（一八四）年、意は黄巾に遭ひ、国を棄てて走る。賊平らぐや国に復り、数月にして薨ず。立つこと五十七年、年九十なり。子の哀王宜嗣ぎ、数月にして薨じ、子無くして、建安十一年国は除かる。

- ・『春秋左氏伝』僖公四年：昭王南に征きて復らず。（周の）昭王は南方（楚）巡視に行つたまま引き返さなかった。

魯肅は列伝に「肅年四十六にして、建安二十二年に卒す」とあり、建安二十二年は西暦二一七年に相当するため、一七二年頃の生まれと分かる。黄巾の乱のとき（一八四年）、十三歳である。このとき下邳王は劉意。

十三歳の魯肅は、国を棄てて逃走する劉意を「目撃」し得る。劉意は黄巾平定後に国に帰るが、数ヶ月で薨去した。列伝が述べている黄巾平定の時期は定かでないが、首領の張角討伐を指すとすれば、中平元年に収まる。劉意は、数ヶ月の逃亡生活が老体にたたたり、中平元年～二年のうちに九十歳で亡くなったと推測される。少年魯肅が接点をもつ可能性があるのは、八十代後半の老王と設定できる。

- ・老齡の皇族 = 衰退期にある王朝の象徴・代理
- ・国を棄てて逃亡 = 王朝の終焉を意識させる … モチーフとして最適！

3. 下邳王に謁見する場面づくり

史料に沿い、魯氏を在野の豪族と設定した。官僚の息子ですら下邳王と会うのが不自然であり、ましてや在野の少年が王に面会するのは難しい。

下邳に関わる人物で、魯肅と下邳王を結びつける人物が欲しい。地位を持った人物がよい。『三国志集解』魯肅伝に見える「東城太守の陳登」は、下邳の人ではなかったか。

Wikipedia 陳登：陳登（生没年不詳）は、中国後漢末期の武将、政治家。字は元龍。徐州下邳国淮浦県（現在の江蘇省淮安市漣水県）の出身。父は陳珪。

やはり陳登は下邳国の人なので、下邳城に出入りさせるのは不可能ではない。魯肅が、故郷の東城県から下邳城に上る場面を作れば、陳登と合わせることができる。

呂布伝注引『先賢行状』によると陳登は、「甚だ江・淮の間の歡心を得たり。是に於いて江南を吞滅するの志有り」とあって、孫策と匡琦城で戦った後、「孫権 遂に江外を跨有す。太祖（曹操）毎に大江に臨みて歎じ、『早く陳元龍が計を用ゐざるを恨む』と」とあり、曹操から認知されている。

魯肅と出身国が同じで、孫権と敵対し、曹操に認知されているため、物語を盛り上げてくれそう。没年が未詳のため、ストーリーの都合で死期を操ることができる。…登場決定！

陳登は、淮水・江水一帯を支配した群雄なので、早期から人材を積極的に集めていたと考えても矛盾しない。下邳で食客を集めて養い、その募集の網に魯肅が引っ掛かるという流れを思いつく。どのように陳登と出会うかは、後から検討すればよい。投資家として有能ということは、予想を的中させられる。賭博の才能を発揮することにしよう。

陳登－魯肅の繋がりを作るが、下邳王劉意－陳登の繋がりには可能か。下邳陳氏の族的背景をたどることで接点を求める。陳登が生まれたのがどのような家か、Wikipedia 陳登の項に見えなかった。父の陳珪の項を参照する。また、袁術伝の記述も想起される。

- Wikipedia 陳珪：陳珪（生没年不詳）は、中国後漢末期の官僚。字は漢瑜。徐州下邳国淮浦県（現在の江蘇省淮安市漣水県）の出身。曾祖父は陳屯。祖父は陳臺（広漢太守）。伯父は陳球（太尉）。従兄弟は陳瑀（呉郡太守）・陳琮（汝陰太守）。子は陳応・陳登。
- 『三国志』袁術伝：時に沛相たる下邳の陳珪は、故太尉たる球の弟の子なり。術珪と俱に公族の子孫たれば、少きとき共に交游す。

陳登の大伯父（父の伯父）は、三公の陳球。『後漢書』列伝四十六 陳球伝によると「歴世著名」の家柄であり、王と接点があっても不自然ではないと強弁し得る。陳登は、家柄の高さによって下邳王に謁見することができそうだ。

陳登はなぜ、魯肅と下邳王を会わせたいか。理由が必要である。陳登にメリットがないと、魯肅を合わせる必要がない。陳登の動機を創案する。

野心に溢れる陳登は漢室の衰退を感じ取り、正確な未来予測をしたいと思っている。博奕がうまい魯肅に、下邳王を査定させたい。だが、単に人物評価をさせるのでは、「投資家の物語」という基軸から離れる。魯肅の手元には資金があり、その身銭を王のために出すかを判断させる、というストーリーを思いつく。

しかし、王が在野の少年に借金をするとは思えない。王が発行している債券（下邳国債）があるとし、魯肅がそれを市場で買うか否か……という話にする。少年が独力で取引を成立させるのは説得力がないため、在地有力者の陳登が立ち会い、取引を保証する。……

4. 『魯肅伝』上より

「子敬（魯肅）に会わせたい人がいる。会って、その人物に金を貸すか判断しろ。もちろん、貸すのは子敬自身の金だ」

陳登は、魯肅に博打の才能があると見ている。凄腕の博徒がその人物をどのように判定するか、意見を聞きたいらしい。まさか畏ではあるまい。（中略）

「子敬は――」 ゆったり歩きながら、陳登が聞いてきた。「下邳国の歴史を、どれぐらい知っている」「歴史？」

「そう。成り立ち」

「知らない。ほとんど」

ほとんどどころか、全く知らない。故郷が下邳国という区画に属していることを知ったのも最近である。

道すがら、陳氏の側近が教えてくれた。

「下邳国は、もとは臨淮郡と言いました」

「すまん、知らない」

「昔の呼び名ですから」

魯肅伝は、魯肅の出身地を臨淮郡とする。しかし彼の少年時代、この地域は下邳国と呼ばれた。王が封建されていたからである。最初に臨淮郡を設置したのは、前漢の武帝。後漢の永平五（七二）年、劉衍がこの地域に封建されると、臨淮郡は下邳国と改称された。

（中略）

説明が済んだのを見計らい、陳登が、「下邳王の劉意にこれから会いに行く」と言った。

「えっ。下邳王は、実在するのか」

魯肅の声が裏返った。

「何をいう。説明を聞いていたか」

「聞いていた。しかし、藩王に実権はなく、形式だけの存在だということから……」

実在性に現実感を持ってなかったのだ。

陳登は苦笑し、「実権はない。藩王と言うからには、皇帝に危機が訪れたら、防壁となることが期

待されているが、役に立つのか怪しいと思う。周の時代に、王の親族を各地に封建する制度があった。それを模範とし、体裁だけを整えているのだ」「説明は分かるが……」やはり実感がない。魯肅が馬鹿なのではなく、当時の人々の認識はこの程度ではなかったか。

「高貴すぎて実感が湧かぬ、と言っておけばよい」「なるほど」その言い方ならば、政治的に正しい。

陳登がどんどん進んだ。

「実権がないからこそ、象徴的な存在――王朝の姿を体現していると、俺は思っている。だから子敬を下邳王に謁見させる」

「王に謁見か……」

「嬉しそうだな」

「嬉しくない」

と口答えしたが、恥ずかしながら、若干、清らかな気分になっていた。王朝を軽視する家に育ったが、やはり漢王朝の支配下、四百年も続く帝国の一員なのかも知れない。

下邳王の住居は、城内の北にあった。

中央に道路が走っているから、住居は、やや西ずれていた。この城は、王が住むことが前提で建築されたのではない。もともとあった城に、光武帝の孫が移ってきたという順序である。

「質素だな」

街歩きするとき、前を通ったことがあるかも知れない。だが王の住処とは気づかなかった。点在する貴人の家の一つ、という程度の外観をしている。

見目でいえば、陳登の屋敷のほうが立派である。陳氏は塀にまで装飾を施し、道路から望むことができる屋根に鳳皇の彫刻が乗っていた。

「地味だろう。だが、これには秘密がある。外からでは、真価が分からないように工夫されているのだ」

陳登が、悪巧みをするような表情をした。